

# 新版K式発達検査の項目「絵の敘述」； 図版の変更と反応内容の分析

中 瀬 惇

## 第1章 はじめに

Binet (1905) によって知能検査が作られて以来、心理検査の中で最も信頼性の高い検査として、世界中で数多くの知能検査が作られ、使用されるようになって来た。検査の対象も、当初の就学児から、成人用の団体知能検査、乳幼児を対象とする発達検査と拡がり、内容的にもスクリーニング検査から精密な診断用の検査へと目的に応じて使い分けられるようになった。

我々は、京都市児童院で昭和25年に試作し、以来院内で研究的に使用されて来た通称K式検査を公開するために、検査全体を再検討し、項目にも手を加え標準化し直す作業を行って来た。京都の頭文字を取ってK式と呼ばれた検査を、1980（昭和55年）に「新版K式発達検査」として、検査用具と検査手引書を発行した（嶋津・生澤・中瀬 1980）。さらに、検査の対象年齢を12才頃までに拡大し、検査結果の標示方法も改善して、1983年（昭和58）に「増補版」を発行した（嶋津・生澤・中瀬 1983）。検査の理論的背景や、標準化作業の内容と資料等について懸案であった詳しい解説書も完成した（嶋津 1985）。「新版K式発達検査（増補版）」（以下、新K式検査と略記）の詳しい内容については解説書を参照していただきたい。

新K式検査を作成するに当っては数多くの問題が存在した。その1つは、旧K式当時の検査材料や、被検者への教示が古くなり、現在の文化・社会にそぐわなくなっている問題であった。「薪と炭」の相異を尋ねられて判る子どもは少ないし、「下駄」の絵を見て「まないた」と答えるような事が生じていた。検査内容を現在の文化・社会的状況に合わせる作業は、今回の改定作業の重要な課題の一つとして行われた。その中に、「絵の敘述」と呼ばれる検査項目がある。この論文では、「絵の敘述」の刺激材料である3枚の絵と判定基準の見なおしの作業について述べる。

## 第2章 「絵の敘述」の課題

### 1. 課題の歴史

絵を子どもの知能検査の課題として使用し始めたのは Binet である。最初、Binet & Simon

(1905)では、絵は叙述の対象ではなく、絵に描かれた人物や事物を指し示したり、名称を言ったりする課題であった。しかし、Binet & Simon (1908)では、叙述の対象として絵が使われるようになった。その後、Terman (1916)のStanford Binetでも絵を叙述する課題は使われ、日本でも、鈴木ビネー (1936)で使われ、京都市のK式、K-B式(京都ビネー個別知能検査)にも使われることになった。

## 2. Binet & Simon の課題

Binet & Simon (1905)では、色彩のある2枚の版画が検査に使用された。図1に示した絵は、家庭内の入り組んだ情景と呼ばれ第8問に使われている。課題としては、図版の中の窓・母親・姉・女の子・猫・ほうき等を1つずつ順番に指し示しながら「窓はどこ。」「窓はどこか教えてちょうだい。」と教示して子どもに指示させる。言葉による絵の認識を調べる項目であり、子どもが事物を探そうとする行動と、絵の中に事物を認識することが求められている。図2の版画は第9問に使われる。課題としては、女の子、犬、男の子、父親、街灯、空、ポスターを順番に指し示し「これは何ですか。」と教示する。子どもの語彙と発音を調べる項目と位置付けられている。以上2つの課題は、K式検査では「絵指示」「絵の名称」の項目として2種類の図版を作成して使っている。3歳未満の子どもに検査がやり易く、発達水準をより詳細に判定するための工夫である。

Binet & Simon (1908)に、項目「絵の叙述」の原型がある。ここでは、難易度を定めた3枚の版画(図3~5)が使われている。絵は無彩色であるが、人物が中心となっていて、1つのテーマを表現するような絵が選ばれている。この検査項目は、後に、完成した知能検査の形で出版された1911年の検査に(Binet & Simon 1911)第3問として、同じ図版で採用されている。この検査項目で、Binet & Simonは、絵を見せたときの子どもの反応から、事物から言葉への内的過程を調べようとする。

教示は、「この絵は何を表わしていますか。」であって、子どもがその質問に答えられないときや「絵です。」などの見当はずれの答えをしたときにだけ「何が描いてありますか。」と言う形の質問をしても良いと定めている。(大井等の日本語訳では、注に誤解があり、この部分が判らない。注は、「何が描いてある。」と言う形式の質問は、「これは何を表現していますか。」の問いに子どもが答えられなかったときにのみ使って良い。とすべきだろう。)子どもの反応がどのような場合でも「この人は何をしていますか。」と質問をするのは禁じている。

子どもの反応は、3つの水準に分けて判定され、反応の種類によって対応する年齢(知能年齢)が定められている。

第1水準 列挙による反応(3歳)

第2水準 叙述による反応(7歳)

第3水準 解釈による反応(15歳)

Binet & Simonが見出したのは、絵に対する最も初歩的な言葉による解答の段階は描かれている事物(名詞)を列挙する反応であり(3歳)。描かれている事物の再現と識別が出来ることを示



図1 Binet & Simon (1905) 絵の指示用図版

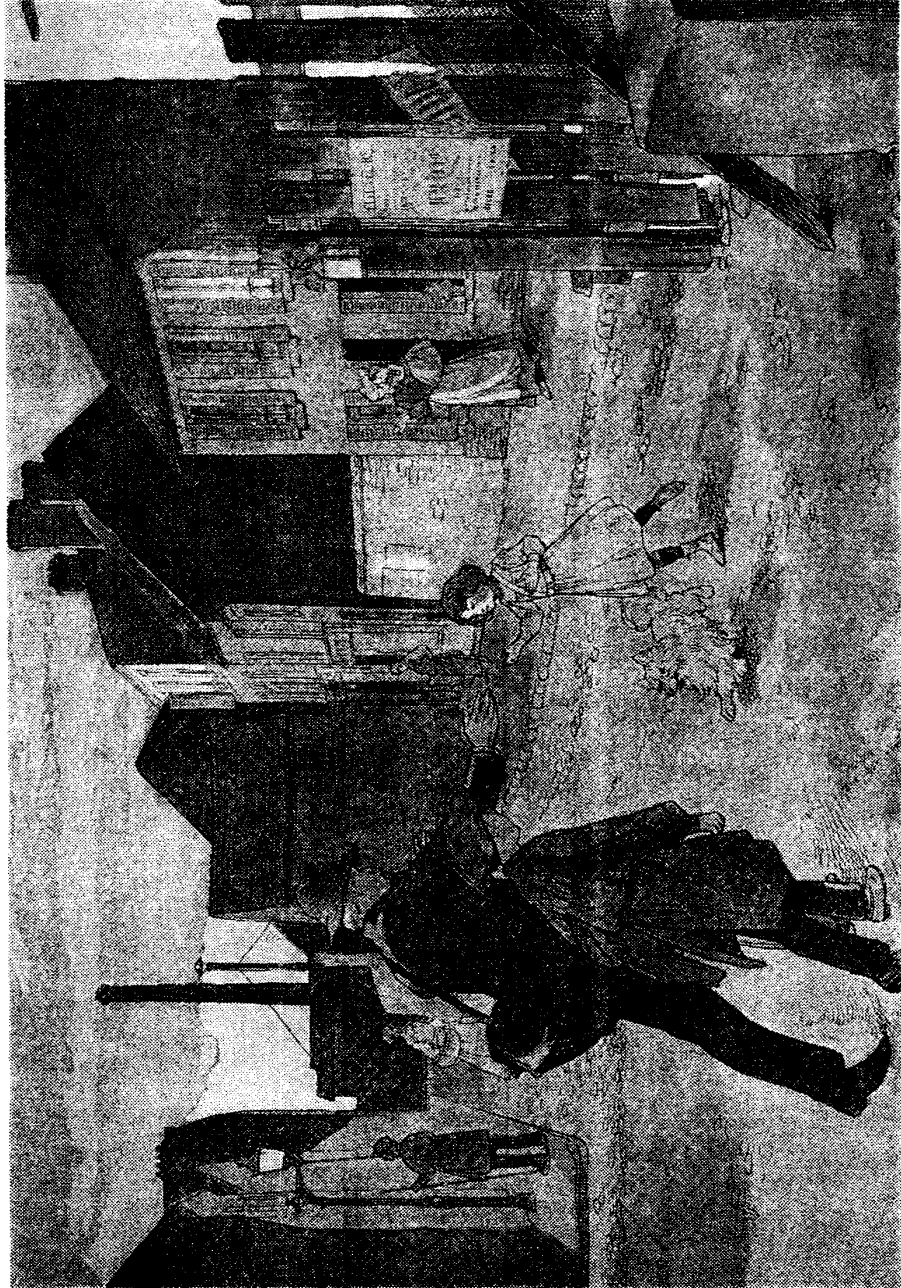


图2 Binet & Simon (1905) 絵の名称用図版



図3 Binet & Simon (1908, 1911) 版画, 図版1



図4 Binet & Simon (1908, 1911) 版画, 図版2





図5 Binet & Simon (1908, 1911) 版面, 図版3

していると考えた。7歳になると、描かれている主人公の特徴や状態を関係付けて叙述出来るようになり、15歳になると、図3に「引越しをしている不幸な人。」、図4に「夜です、不幸な人達。」、図5に「囚人」などのように、単に描かれている事物でなく、その情緒的な状況などの解釈が加えられるようになる。「不幸」「引越」「囚人」などの答えを解釈による反応と呼んでいる。

### 3. Stanford Binet の課題

Binet の検査は、アメリカに渡って広く使われるようになった。Terman (1916) による、Stanford Binet 検査が最も重要な役割をはたした。

Terman は版面を使用する検査を2つの点で変更した。まず、検査項目を、列挙の段階と叙述の段階だけを測定するようにした。次に、使用する版面をアメリカ的にすると共に、内容も子ども向けに変更した。図は家庭の躰け、カヌー、郵便局の3枚である。(図6～8次号予定)

これが、鈴木ビネーを通して、日本のビネー検査の出発点となった。

#### 4. 鈴木ビネーの課題

日本では、鈴木 治太郎を中心に最初のビネー検査が作られ、今でも鈴木ビネー（鈴木 1948）として広く使われている。検査項目は Stanford Binet の図版を日本の情景に置き換えて、制作・使用された（図9～11）。絵の呼び方は多少変更されたが、被検者である子どもには関係ない（絵の呼び方は教示されない）。項目の対象年齢も、2～3歳用の「絵の中の事物を列挙」する課題と、6～7歳用の「絵の内容の敘述」の課題であり、Terman と同様である。

#### 5. K式検査の課題

京都市児童院（現・京都市児童福祉センター）では、昭和25年（1950）からK式乳幼児発達検査（京都市児童院 1962）と、K-B個別知能検査（京都市児童院 1962）が作成されて来た。この2つの検査が統一されて新K式検査になったのである。

K式、K-B式（京都ビネー）共に、検査項目として「絵の敘述」を含んでいた。図版は、鈴木ビネーの絵を当時の社会に合うように変更したものを制作した（図12～14）。京都の土地柄を反映して日本画家に絵を描いて貰ったので線の単純な画面になった。又、子ども向きであることをより強く意識した絵になっている。絵の提示順序も変更された。

検査項目としては、6歳用の敘述を求める課題に限定された。絵の指示や絵の名称を言わせる課題は、別の図版を用意して、それぞれが独立した項目とし、反応の年齢段階を詳細に弁別出来るようになった。その為、この課題で列挙の反応を採点する必要がなくなった。

教示は、「これは何を描いた絵ですか。」「何の絵ですか。」「この絵についてお話してごらん。」と三重に発問するように定められた。

採点は、敘述と認める文章の形式を具体的に6つの形に分類表示し、正答例と誤答例を数多く列挙して説明していた。その為、未熟な検査者は、反応の本質を考えるよりも、実例と照合して合格・不合格を判定しようとする傾向が見られた。

#### 6. 新K式検査の課題

K式検査も作成されて約30年が過ぎ、検査項目の内容が現在の文化・社会的状況と合わなくなったものも出て来た。「絵の敘述」用の図版も改める必要が生じた項目の1つである。

今回は、絵の内容も検討することにした。特に、図版1（図12）は、泣いている女の子が描かれている。その為、投影法的効果が生じ易かった。他の項目では良好な反応をする子どもが、泣いている女の子の姿を見てとまどい無反応になることをしばしば経験した。勿論、そのような子どもの反応は、子どもの情緒的な側面についての手掛りを与えてくれるのではあるが、少なくとも、知能検査の目的からははずれている。場合によれば、検査を施行し難くする原因ともなる。そこで、子どものネガティブな情緒的反応を引き起さないような図柄に変更することにした。

絵を変更するのであるから、絵としても、もう少し良いものにしたいと思い、京都市立芸術大学の日本画科を出て現在、大学の専任講師をしている女流画家に制作を依頼した。その結果出来た絵が、図15～17である。

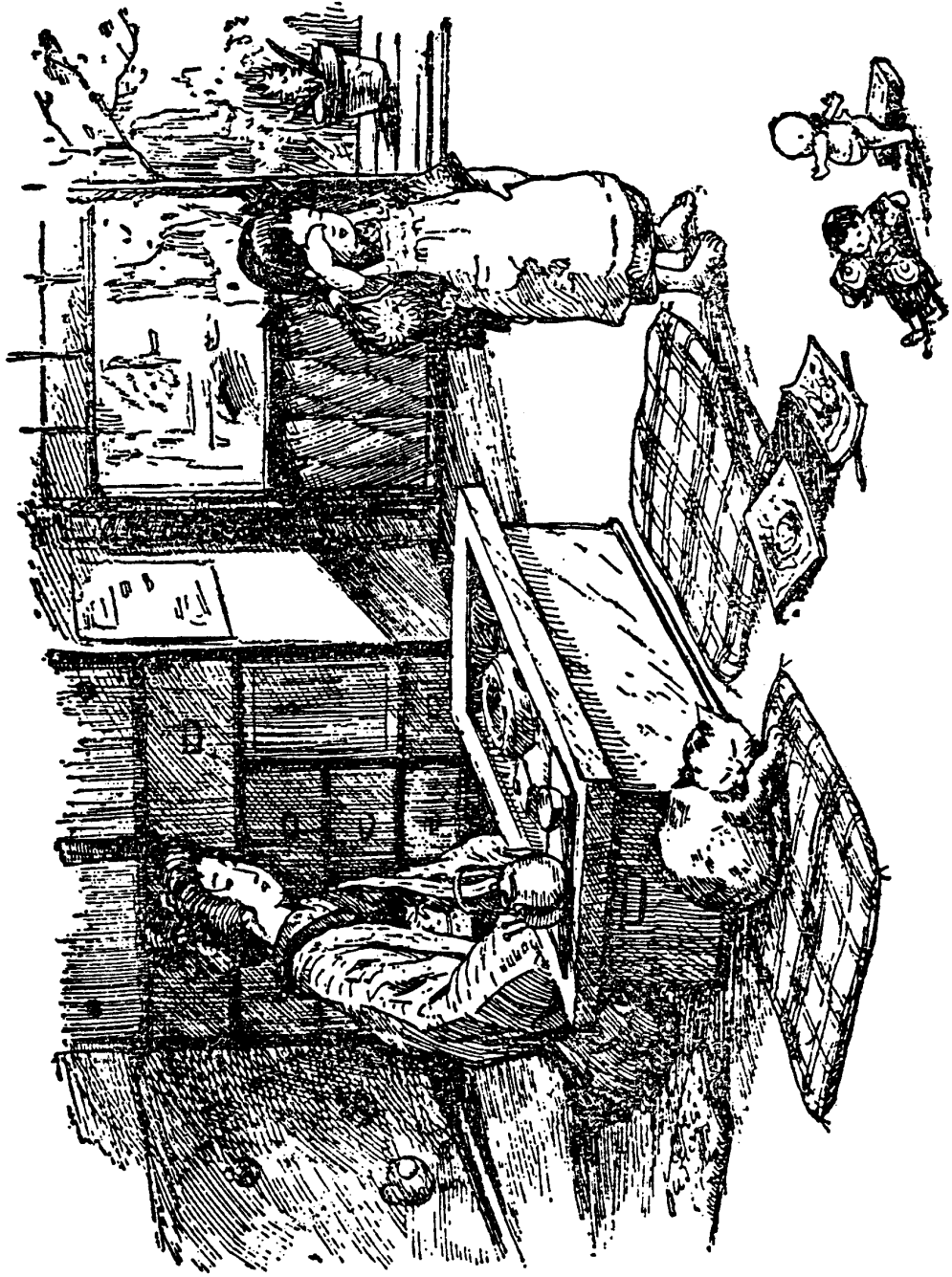


図9 鈴木ビネー (1948) 家の絵 (第1図)



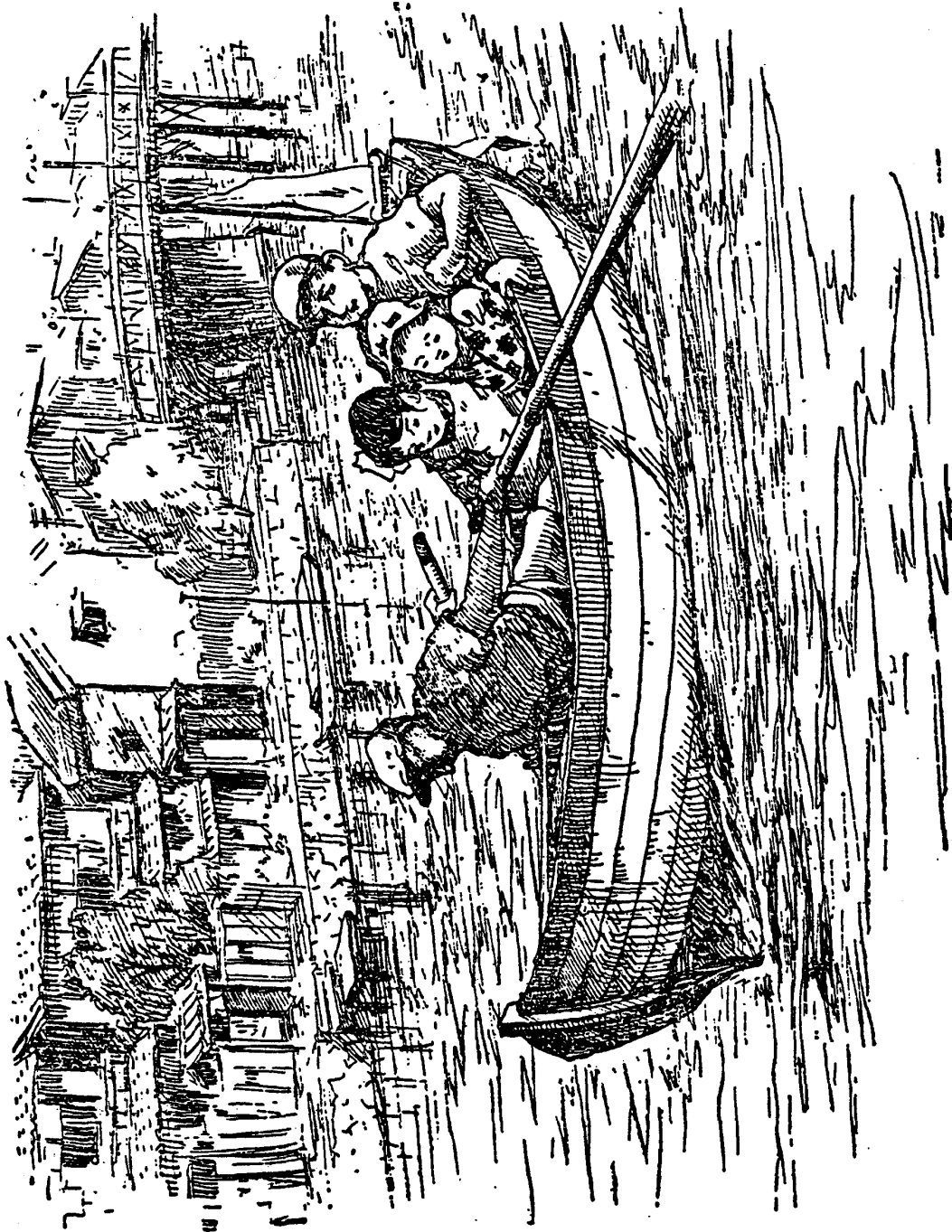


図10 鈴木ビネー（1948）川の絵（第2図）

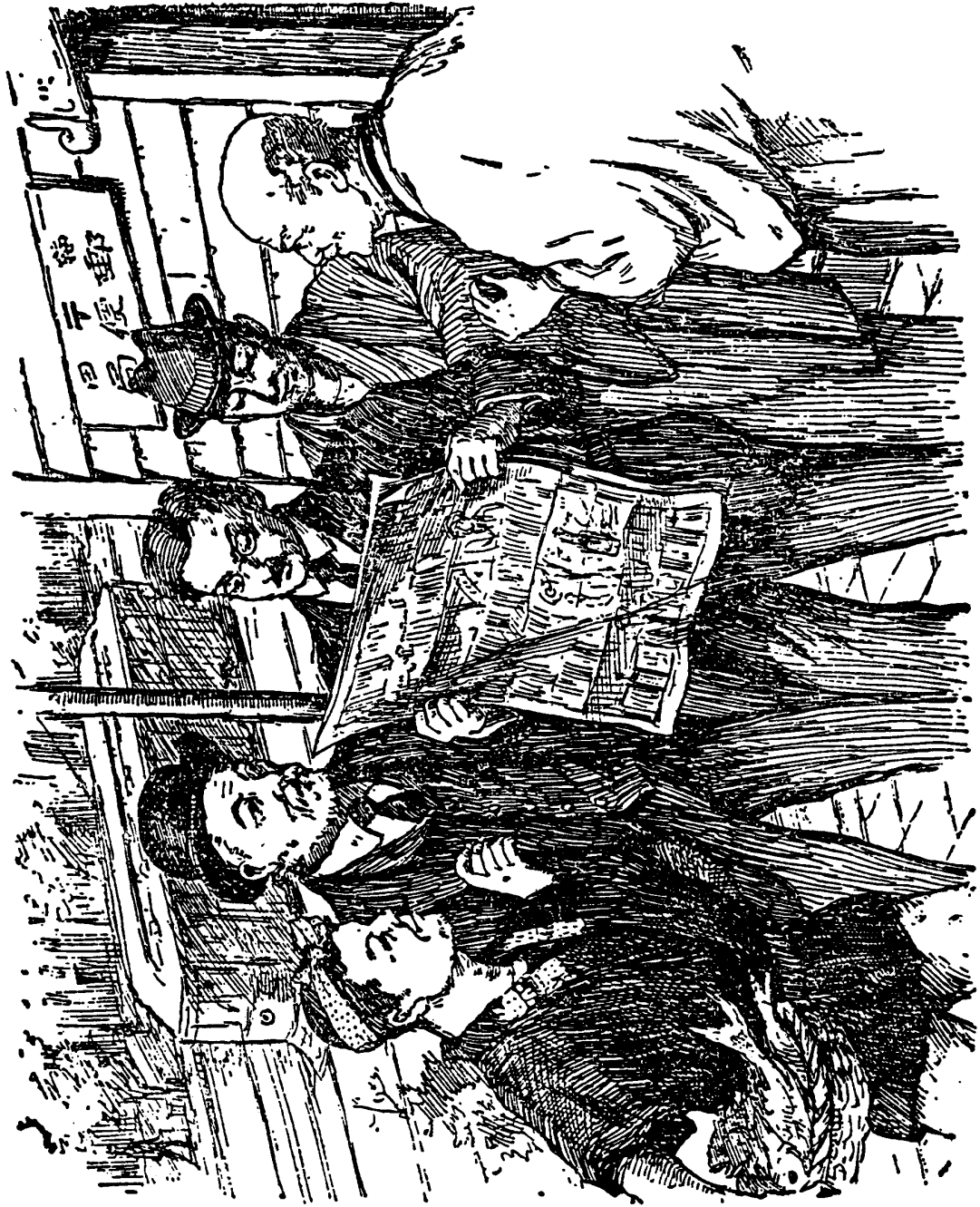


図11 鈴木ビネー (1948) 新聞を見ている絵 (第3図)



図12 K式発達検査, K-B式個別知能検査 (1950) 図版1 家の絵



図13 K式発達検査, K-B式個別知能検査 (1950) 図版2 新聞を見ている絵

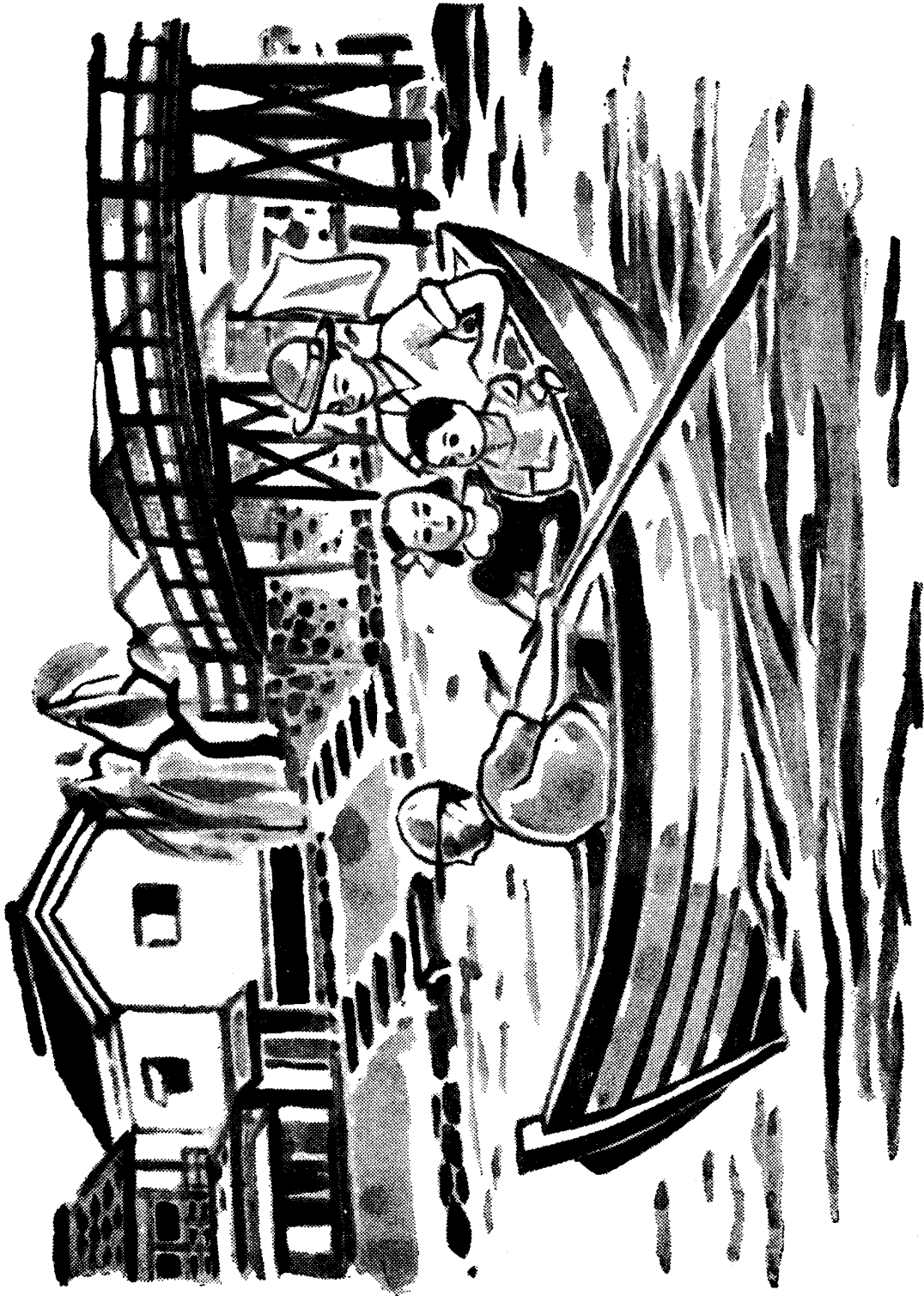


図14 K式発達検査, K-B式個別知能検査(1950) 図版3 川の絵



図15 新K式検査(1980, 1983) 図版1 部屋の絵



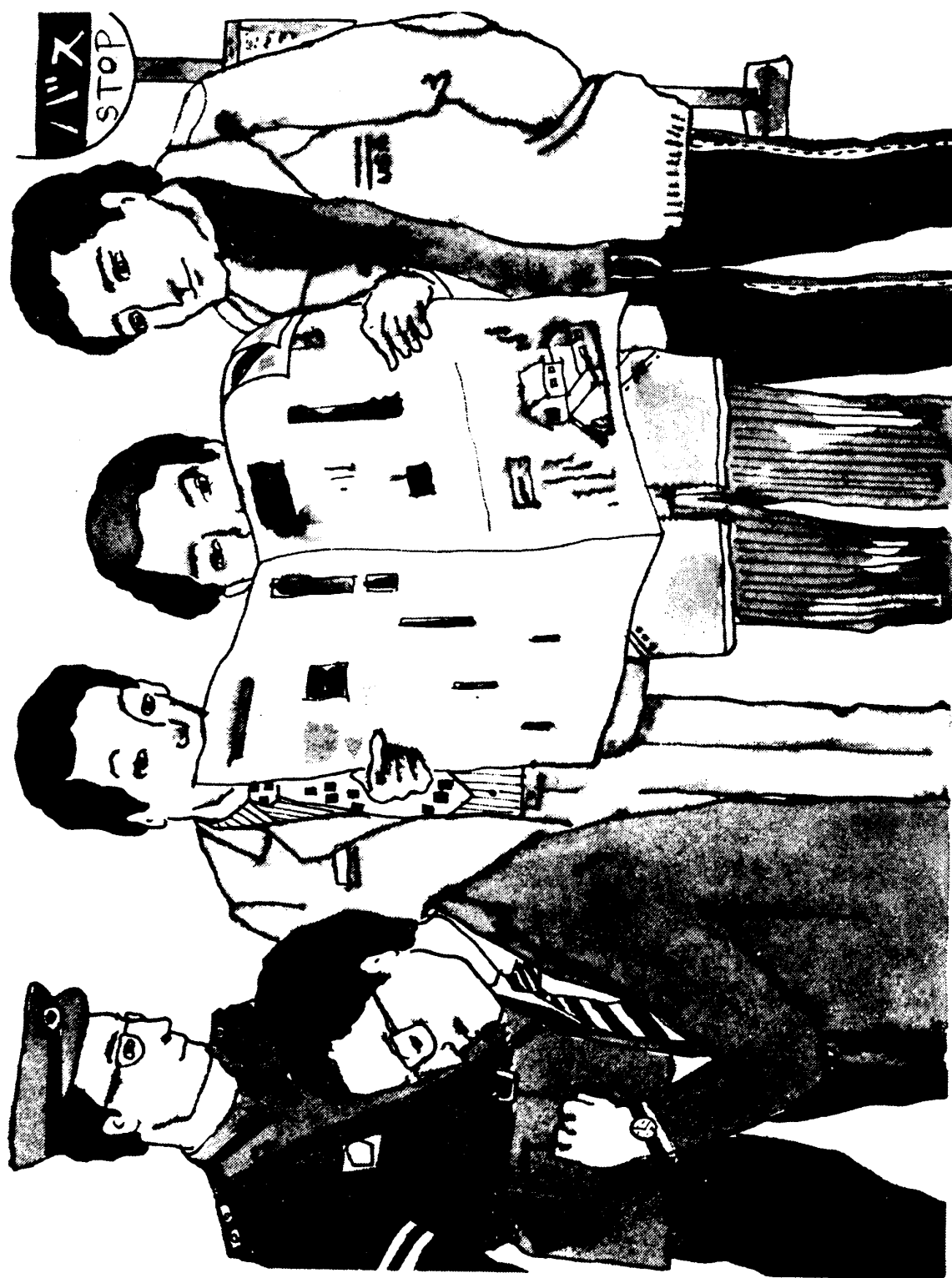


図16 新K式検査（1980，1983）図版2 新聞の絵



図17 新K式検査 (1980, 1983) 図版3 舟の絵

教示は、変更していない。判定の方法については、後に述べるが、この研究の結果にもとづいて1部変更した。

### 第3章 目 的

新K式検査の為の標準化作業において、「絵の敘述」用の図版を変更する必要が生じた。絵を取り換える、大きな変更であるから、変更が上手く行くかを調べたり、通過年齢がどのくらいか見当をつけるために、新しい図版を使って予備調査することにした。この論文は、その結果の報告である。

新K式検査の標準化作業を進めるに当たって、もう1つ目標にしたことが有る。それは、これ迄の判定基準が、項目それぞれに独立した、詳細な具体的分析によっているため項目間に共通した判定基準がなく、項目ごとの正答基準を詳しく覚えなければならず判定が煩瑣であった点である。かなり熟練した検査者でも正答基準の表に頼らなければならないのでは不便である。そこで、子どもの反応を検討しなおして、言葉の項目に共通するような基準を作りたいと考えた。

予備調査の目的は、以下の3つにまとめられる。

1. 絵を現在の文化・社会的状況に合うように改めること。
2. 図版1の情景を、子どもがネガティブな情緒的反應を引き起さないものに改めること。
3. 子どもの反応内容を分析して、判定基準を再検討すること。

### 第4章 方 法

前記の目的で、新しく作成した「絵の敘述」用の図版を使って資料を集めることにした。

検査は、童心会の人達に依頼した。童心会とは、児童院が幼稚園・保育所に出張して行っていた判定・相談活動に、昭和20年代始めからアルバイトとして参加していた人達が、昭和40年代半ばに独立し命名した、知能検査の専門家集団であり、現在も児童福祉センター（旧、児童院）とは協力関係にある。

検査の実施時期は、昭和55年1月17日～2月22日である。

被検児は表1に示す。京都市内のI幼稚園児129名と、S保育園児124名、合計253名である。被検児の生活年齢（CA）と、K-B検査による知能指数（IQ）の平均も記入した。年齢は4歳2ヶ月から6歳10ヶ月まで、IQは68から157まで分布している。（表2）

被検児の人数は、これ迄の「絵の敘述」の通過年齢が6歳5ヶ月であったため、発達の加速現象も考慮して、5歳から6歳の年齢段階がそれぞれ50名を超えるようにした。

課題の施行方法は、検査項目の場合と同じだが、1つだけ異なるのは、図版1・2共に正答、共に誤答である場合にも図版3への反応を求めた点である。

## 第5章 結 果

### 1. 被検児について

被検児は表1に示した。I Qがやゝ高いように見えるが、これは改定前の換算表による計算結果なので止むを得ない。使用検査はK-B検査である。

I Qの分布と、I Qごとの生活年齢の平均を表2に示した。I Qは109を平均としてガウス分布を示している。当時の検査の標準値を知るため、過去10年間に京都市内の保育所と幼稚園で、童心会が行って来た知能検査の結果を表17に示した。K式検査とK-B検査は似た結果を示すから、新K式検査の作成前に、平均I Qが高くなり、換算表の検討が必要な状況が良く解る。この研究を行った頃の平均I Qは、約10程高くなっていたことが良く判る。

56年度からは、新K式検査を使用するようになった。但し、換算表は、公表した以外に我々は色々と検討して何回も手直ししていた。童心会には、新しく作った換算表をその都度使用して貰い、分析・検討の材料としていた。56年から58年にかけては途中で何回も異なった換算をしていた。現在公表している換算表を使うようになったのは、昭和58年の秋からである。昭和59年度の検査は、全て現在の換算表が使用されている。平均値がほぼ100になっているのが判る。

### 2. 反応の分類

新しく作った図版は、名称を改め、図版1(図15)を「部屋の絵」、図版2(図16)を「新聞の絵」、図版3(図17)を「舟の絵」と命名した。

4歳2ヶ月から6歳10ヶ月の子どもの反応は、名詞を列挙する答えと、描かれた事物を叙述しようとする答えに大別出来る。又、図版に列挙と叙述の両方を行う子どももあった。

図版1から図版3のそれぞれに、列挙、列挙と叙述、叙述の3通りの反応をする子どもがどのくらい居るかを表3～5に示した。表はすべて、列挙した子どもの人数とその%、列挙した名詞の数の総計と、列挙した人数で割った1人当りの平均列挙数の順に表わし、以下、同様に列挙と叙述の両方をした人数と、平均列挙数と平均叙述数、最後に、叙述した人数とその%、平均叙述数の順序で記載した。

子どもの叙述は文章がきちんとしていないためどこまでを1つの叙述と考えるか困難な場合も少なくなかった。子どもの表現の仕方、時間的な間などで1つの叙述と区分した。

表3～5から明らかなように、列挙による答えは、年齢の進歩と共に減少する。列挙と叙述の両方を行うのは全体に少なく5:6から5:11で多くなるが、後は減少する。叙述の答えは、4歳代では少ないが年齢と共に増加し、6歳でおおむね50%を超える。列挙と叙述の両方を行った数も加えると5歳代に50%を超える。

列挙される名詞の個数は、図版1が多く、平均5.90である。叙述の数は、列挙の数より少ないし、図版による差も少ない。

以上の結果から、以後、列挙の答え、叙述の答え共に列挙と叙述の両方を行った被検児の反応を含めて分析する。

### 3. 列 挙

列挙による答えが、どのように生じるかを調べるため、図版ごとに列挙された名詞を全てそのままの形でまとめたのが表6～表8である。

表6を見れば、図版1では、列挙されるのは、猫・人形・積木・箆筒・椅子・お母さん・子どもの順であり、猫・人形・積木は低年齢に多く、お母さん・子どもは高年齢で増えているのが判る。

表7からは、図版2では、新聞・おまわりさん・ひとなどが多く、人物の命名は年齢と共に多くなる。表8から、図版3は、命名される対象が分散している。

表に示した数は、表記の名詞を言った子どもの数である。表6～8を見ると、図版1では列挙による反応をする子どもの数が多いし、列挙される対象物も多いことが判る。図版1は、子どもに列挙の反応を引き起し易い絵であることが判る。

図版1に最も多く名詞を列挙したのは、6歳10ヶ月でI Q 68の男子で、16個の列挙を行った。Binetも指摘しているように、知的に劣った年長児で多くの列挙が生じる場合である。しかし、6：7でI Q 111の女子に13個、6：3でI Q 101の男子に12個、6：1でI Q 107の男子に13個など多くの列挙をする子どもは他にもいるし、5歳未満では、優秀児が多くの列挙をする傾向もあり、列挙の数だけで子どもの知的水準を知るのは難しい。

Binetも指摘しているが、列挙による答えに付け加えられるいくつかの特徴がある。それらを表9にまとめて示した。

接続詞を使って列挙するのは5歳前半に多く、使われるのはほとんどが“と”であり、稀に“に”が用いられる。

「遊んでいる絵」「新聞を読んでいる絵」「舟の絵」「舟に乗っている絵」等、“……の絵”と言う反応も時々生じる。反応だけを見ると高度な反応のようにも思われるが、表にまとめて見ると年齢に従って増加しているのではなく、正答に数える必要のないことが判る。

「イル、アル」の反応、「人がいる。猫がいる。」等“イル”や“アル”を使いながら列挙する反応も存在する。これだけの資料では、7歳以後の変化が判らないが、出現率も少なく、単調な増加ではないし、経験的にも高年齢で増加する傾向は認められないので、これも正答と考える必要はない。「人がいる。」は、文章としては完全な形をしているが、日本語の習慣として、“イル、アル”は叙述に含めない事にする。

図版への反応が生じない状態を、無反応（NR）と呼ぶ。3枚の図版に対する無反応の出現数を表9にまとめた。多い図版でも2.37%であり、図版1と図版2では同数である。旧図版の無反応出現数をまとめた資料がないので確かなことは言えないが、旧図版では明らかに図版1で無反応（あるいは反応拒否）が多かったし、無反応の出現率も多かった。童心会の検査者も皆、新しい図版になって無反応が減少したとの印象を持っている。新しい図版への変更は、この点でも成功した

と言えよう。

#### 4. 叙 述

図版への正答である「叙述反応」について調べる。叙述は、文章中の動詞だけが異なったり、主語の表現が異なったりして全ての表現を列挙するのは、あまりにも冗長なので表現形式の同じものをまとめて作表した。図版1から図版3の結果が表10～12である。

##### (図版1の反応)

表10から明らかなように、叙述の反応は年齢の増加に伴って単調に増加している。“猫”を主語にした文が多いが、60中56は「猫が寝ている。」と言う文である。他には、“子ども”、“母親”など絵の主人公を主語にした文章が多い。“猫”を主語にした文章も年齢と共に単調増加しているが、ほとんどは“人”を主語にした反応を伴っている。伴っていないのは16例であり、16例の分布を調べると年齢との関連が認められない。それ故、“猫”を主語とした叙述は正答基準から除くことにする。

表中、“動詞”はすべて「遊んでいる」を示し、“…で遊ぶ”は「積木を散らす」「人形で遊ぶ」「積木で遊ぶ」等をまとめた。

“子……する”は、「子どもが遊んでいる。」が主である。“子が…を…する”は、「子どもが人形をだいている。」「子どもが人形で遊んでいる。」「子どもが人形を持っている。」が主であるが、人形は、玩具等に言い換えられていることもある。

“母が…する”は、「母が坐っている。」が主である。

“母が…を…する”は、「母がお茶を飲む。」「母がお茶を置いている。」「母がお茶を持っている。」「母がコタツに入っている。」等、表現は多くまとまらない。

“母と子が…する”は、「母と子が遊んでいる。」「母と子が話している。」等である。

「人」を主語とした文章は、明らかに年齢と共に単調に増加しており、これを正答の基準とした。この正答基準による正答者数と正答率も表13に記入してある。6歳6ヶ月を超えた正答率がやゝ減少しているのが気になるが、図版1で列挙の反応が多いことの影響であろうか。

##### (図版2の反応)

表11から明らかなように、叙述の反応は年齢と共に単調に増加している。主語のない叙述や、新聞を主体とした叙述も目立つが、年齢との関係は認め難い。人を主語とした叙述は明らかに年齢と共に増加する。

“新聞を見る”は、「新聞を読む。」「新聞を持つ。」を含んでいる。

“…を…する”は、「バスを待つ。」「時計を見る。」である。

新聞は「読む」よりも「見る」方が圧倒的に多い。

正答基準は、図版1と同様、「人」を主語とした叙述の文章とする。この基準による正答者数と正答率も表に記入した。正答率は、年齢と共に単調に増加している。

##### (図版3の反応)



表12から明らかなように、叙述の反応は年齢と共に単調に増加している。しかし、主語が省略されて、「ボート、等を含めて「舟に乗る。」と言う反応は年齢による増加が認め難い。それに対して人を主語にして叙述する文章は年齢と共に増加している。

“舟に乗る、は、「ボートに乗る。」「舟をこぐ。」を含んでいる。

“人が乗る、は、「人がこぐ。」を含んでいる。

“人が舟に乗る、は、「人が舟をこぐ。」を含んでいるし、人は「お父さん」「お兄さん」等と変化する。

“列挙・舟に乗る、は、「お父さんとお姉さんとお兄さんと子どもが舟に乗っている。」が最も多い。

その他に、アヒルや小さなヨットなどを主体とした叙述が存在する。「アヒル（小鳥などの云い換えを含む）が泳いでいる。」と言う反応は、5歳以上の各年齢段階に3例ずつ存在する。その他の反応を含めて、例数が少ないこと、年齢水準との相関関係が認められないことの原因によって、正答に含める必要はないと考えられる。

正答基準は、これ迄と同様に「人」を主語とした叙述とする。この基準に従った正答者数と正答率を表13に記入した。正答率は、年齢と共に単調に増加している。

#### 5. 合格基準の検討

図版ごとに、出現した叙述を表にして検討し、正答基準を考えて来た。3枚の図版に共通する正答基準をまとめると“人を主語とした叙述の文、が正答の基準になる。

このように各図版の正答基準が決定されると、次に、「絵の叙述」の検査項目に対して合格とする基準を求めなければならない。そこで、被検児ごとに正答・誤答を判定し、3つの図版に対する正答図版の数を求めてまとめたのが表13である。

3図版とも正答のなかった被検児(0/3)は年齢と共に減少し、3図版中2図版に正答した被検児(2/3)と3図版全部に正答した被検児(3/3)は年齢と共に増加している。しかし、3図版中1図版だけに正答であった被検児(1/3)は年齢との関係が明らかでない。それ故、検査項目への合格を1/3にするのは望ましくない。念のため、3図版中の正答数を3から0まで変化させた時に通過する者の人数と通過率も表13に記入した。0/3が全被検児となるのは説明を要すまい。通過率の上昇を調べると3/3は年齢に逆転があり望ましくない。1/3と2/3の両者は通過率の増加は同じような上昇を示している。しかし、前の考察により1/3の被検児は年齢による増加が順調でない。これ迄の3図版中2図版の正答で合格とする考え方が支持された事になる。通過年齢は5歳の前半に移行し、以前に較べてずっと早くなったが、この項目に限っては図版が変更され、反応が出易くなっている所以で以前の検査と直接に比較することは出来ない。

今回の資料を、新K式検査の標準化資料と較べて見よう。参考の為、標準化資料の数値を表13の右端に再掲した。2/3の通過率と較べると良く一致しているが、6歳6ヶ月を超えた部分で相異が目立つ。図版1の正答率が減少したことに現れているように、6:6~6:11の年齢級の被検児に少し問題があるようだ。表1から明らかなように、生活年齢の平均値には問題がないが、IQの平

均は少し低い。又、表には書いてないが、被検児の年齢は6歳10ヶ月が上限であり、6歳11ヶ月の資料が得られていない。さらに、被検児は全て就学前の子どもである。又、標準化資料には無試行合格による推定値が含まれている。原因はこのような所に存在するのではないだろうか。

#### 6. 知能年齢による分析

反応の正誤は知能年齢によって支配されているのであろうか。知能年齢による反応の出かたを調べて見よう。

知能年齢の水準によって、どのような反応が出るか調べるために、列挙と叙述の反応それぞれについて、被検児の数と平均反応数を表14に示した。列挙は知能年齢が高くなると共に減少し、叙述は知能年齢が高くなると共に増加する。しかし、知能年齢による列挙・叙述の出現率は、生活年齢によるよりも全体に遅れている。

知能年齢による図版ごとの正答率と、3つの図版に対する正答数をまとめて通過率の形式にしたものを表15に示す。前述の知能年齢と生活年齢の関係が明瞭に現われている。表10～12を見ると、図版に対して正答率が50%に達する生活年齢は、3図版共に5歳半にある。しかし、正答率が50%に達する知能年齢は、3図版共に6歳後半になる。当然ではあるが、検査項目への合格率も、生活年齢では表13により5歳後半であるのに対して、知能年齢では表15に示したように6歳後半になっている。被検児の生活年齢が、4歳2ヶ月から6歳10ヶ月に限られているので、知能年齢が低い所にはIQの低い子どもが多く、知能年齢の高い所にはIQの高い子どもが多くなっている。さらに、被検児の平均IQが高めに表現されている、10%程度高いと考えると通過年齢は、おおむね6歳5ヶ月になる。しかし、それでも生活年齢が低く知能年齢が高くなる傾向は残る。両方の年齢が等しくなるように換算されるべきなのか、むしろ、この項目には生活年齢が先行する要素が存在するのか、今後の検討が必要であろう。1つの方法として、知能指数を独立変数とした表を作ることも可能であるが、この場合は、生活年齢の異なった被検児をIQだけでまとめても意味がない。生活年齢の同じ被検児についてIQで分類する表を作る必要がある。今回の被検児数では不可能である。

#### 7. 生活年齢と知能年齢による検査項目の合格分布

生活年齢と知能年齢によって、検査項目「絵の叙述」への合格・不合格はどのように分布しているのだろうか。

生活年齢を横軸、知能年齢を縦軸に、合格者を○印、不合格者を×印で表わしたのが図18である。知能年齢は、K-B(京都ビネー)式個別知能検査によるもので、換算表は現在のものと異なっている。

図より明らかであるが、知能年齢の低い所には合格者が無いのに反して、知能年齢の高い所には不合格者が混在する。何が正答であるのか被検者である子どもにとって判断が難しい。この項目が持っている課題の構造に原因があると考えられる。課題の構造を詳しく調べるためには、もっと高年齢まで、この項目を施行して見る必要がある。

検査項目に子どもの50%が合格するようになる、項目への通過年齢は、生活年齢と知能年齢が同

新版K式発達検査の項目「絵の敘述」；図版の変更と反応内容の分析

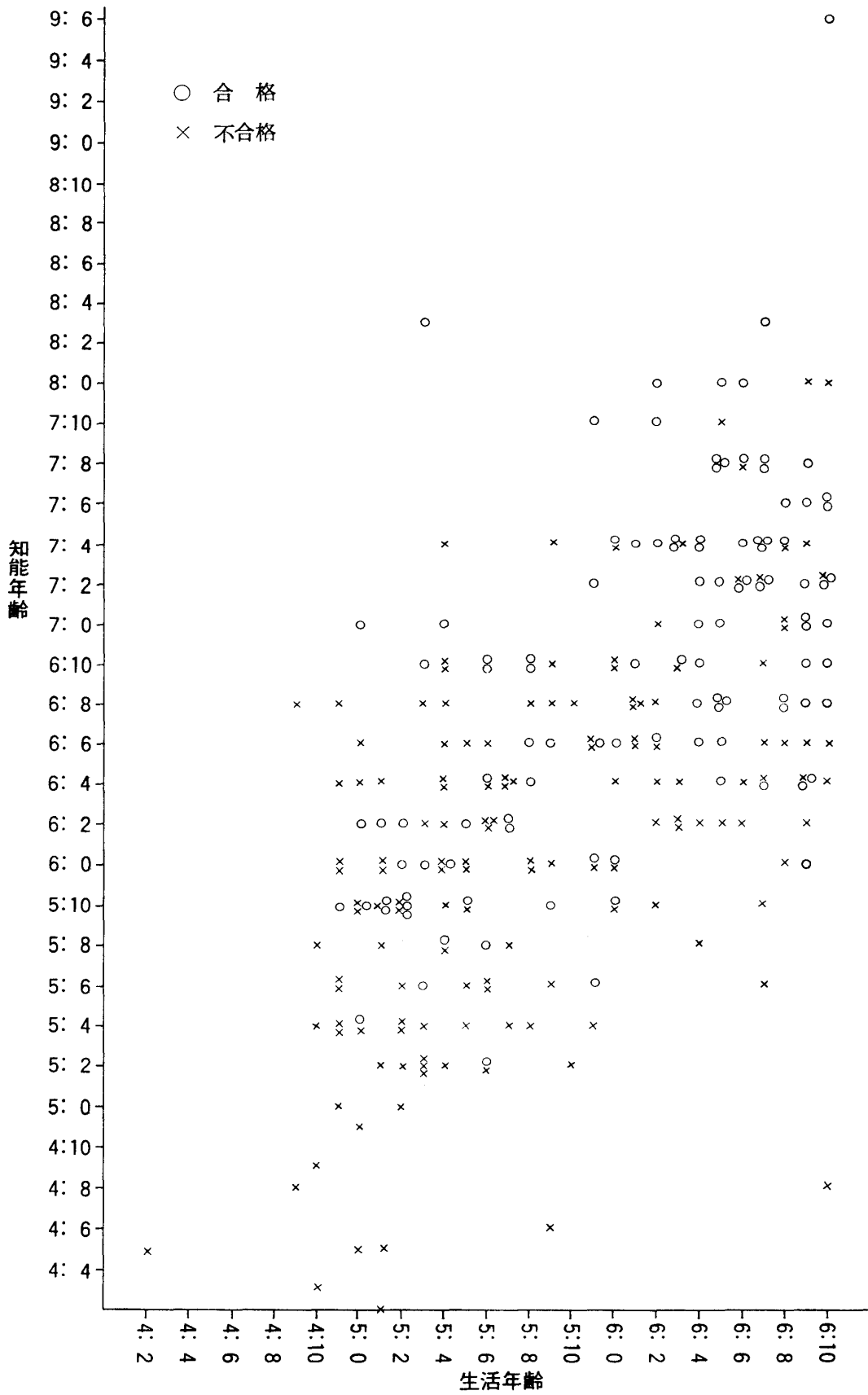


図18 生活年齢と知能年齢による合格者分布

じになるはずである。しかし、表13、15より明らかなように、生活年齢による通過年齢は5歳代後半に、知能年齢による通過年齢は6歳代後半になる。表17から判るように、当時の平均IQが10程高く出る傾向を考慮しても、生活年齢と知能年齢による項目の出来具合が異なっているように思われる。勿論、知能（発達）検査は、多くの項目を合成して求められた結果であるから、全ての項目で完全に合致するとは限らない。

そこで、生活年齢と知能年齢による項目の合格率の変動をもう少し詳しく調べて見よう。図18と同様に、被検児数は少なくなるが、年齢を1ヶ月ごとに分けて合格率の変動を調べて作ったのが表16である。表16によると、生活年齢による項目への通過年齢は6歳3ヶ月すぎに、知能年齢による項目への通過年齢は6歳8ヶ月すぎにあることが判る。各月齢に配当されている被検児数が少ないので心配であるが、この結果は、年齢を丸めて求めた通過年齢と特に生活年齢の場合に差が大きい。被検児を増やして月齢単位で再検討する必要がある。

年齢による合格率の上昇を調べると、生活年齢による上昇はゆるやかであり、知能年齢による上昇は急である。「絵の叙述」に正しく反応する（我々の判定基準において）ようになるには、生活経験も重要であるが、それよりも知能年齢の影響が大きい事を現わしていると考えられる。

## 第6章 要約と考察

新K式検査を新たに標準化して公刊するに際しては、補助的な研究・分析が数多く必要であった。全体的な分析に使用したのは1562人の資料であるが、その他に検査が不備で使えなかった資料も数多い。昭和25年以来、京都市児童院で使用された検査は、毎年1万人前後であり、その間に積み重ねられた臨床的経験も貴重である。童心会による一般の幼稚園・保育園での資料や経験も貴重であった。これらの歴史の積み重ねの上に今回の標準化が存在するのであり、もし、新しく検査を作るとすれば、10倍以上の資料が必要であっただろう。

上述のように、これだけの背景があってもなお、臨時の補助的な資料や、分析が必要だったのである。その1つは、生活年齢の終末修正に関するもので、これは既に学会・紀要等で発表した（解説書参照）。今回報告するのは、検査項目 V36「絵の叙述」に関するものである。絵を新しくしたいと、ただそれだけの願いで始めた作業であるが、それだけでも簡単ではない。実際に項目を施行して資料を分析する必要があった。

### 1. 図版について

新K式検査の図版にたどり着くまでの歴史を、図として掲載した。図を見ているだけでも Binet 以来の検査の流れがしのばれる。

気がつくのは、Binet の絵は、いはゆる子ども向きの絵ではないことである。まともな1枚の絵を見せて子どもの反応を調べる、子どもに対するフランス人の考えと伝統のようなものが感じられる。周知の絵でなく、絵としてまともなものを探し、しかも、子どもの関心を引いて検査者が意図

するような反応を引き起すものを探すのは大変な苦勞だろうと思う。しかし、出来れば我々もそのような絵を手に入れて使ってみたいとも思う。採算さえ考えなければ、一流画家に専用の絵を描いて貰うのも可能であろう。いずれにしても、検査の歴史の中で一貫して子ども用の絵に向って変化して来たように思う、一度根本的に考えなおす必要があるかも知れない。子どもが絵を見てどのように言葉で表現するのか年齢とどのような関係があるのか、それだけでも興味のある課題に違いない。兎に角、新K式検査の図版は、絵として良くなり、子ども達にも好かれる、反応を引き出し易い絵になった。ただし、図版1は、子どもの興味を引く細かな物が大量に描かれた為に、列挙の反応を誘発し易い図柄でもある。

## 2. 正答と合格の検討

1つの図版に正しく答える正答と、検査項目が出来たとする合格について考えてみる。

正答の基準は、単純で判り易いものに越したことはない。図版は全て、人物を主人公にした情景を描いているのであるから、主人公とその状態について叙述するのが望ましい。資料を調べると、付随的な事物についての叙述表現もあるが、いずれも年齢との相関関係が認められず、正答と見なす必要がなかった。絵の主題である人物を主語とした叙述を正答とすれば十分であることが判った。このようにして、正答基準は判り易く単純化された。

合格の基準は、以前から、3図版中2図版の正答としていたが、今回の分析でもそれが正しいことが証明された。

ある検査項目を施行して、子どもの反応を正答と誤答にわけて、項目への合格を定めるのは知能検査や発達検査にとっての宿命である。反応を0か1で判定せざるを得ないのである。しかし、子どもの反応は、単純に正しいか誤っているかに2分出来ないことが多い。反応は、1人1人の発達の様子を反映している。それ故、子どもの反応を合格・不合格に分けてしまうのではなく、反応の段階を細かく分析してやるのが好ましい。K式検査では、1つの項目に対する子どもの反応をいくつかの段階に分けて採点する項目もある。しかし、どのように細かく分けてもその途中の段階に相当する反応が存在するし、検査としては細かく分ける程、判定が困難になる。どこかで合格と不合格に2分せざるを得ない。例えば、両足で歩けるか否かにも数多くの段階がある。新K式検査では、「歩く2・3歩 T12」として項目にしているが、這い這いから歩く迄の中間段階は多い。そうして、そのすべてを項目にすることは不可能である。発達の過程が連続か不連続かは昔からの問題であるが、項目の問題が重要である。人間を歩けるか否かで分類すれば、2つの段階が出来るが、分類は「歩ける」と言う項目の定義に従って決定される。どんな事でも、項目を設定して合格基準を決めると人間を2分する事が可能なのだ。

しかし、検査項目について、子どもがどのような反応をするのか、年齢と共にどのような反応の変遷をたどって成長するのか発達の過程を詳しく知って分析するのは重要である。このような観点からは、検査項目の数だけ研究が必要である。

「絵の叙述」における子どもの反応を分析するには、絵に対する子どもの反応を調べるだけでな

く、子どもの言葉の発達過程を調べる必要もある。子どもの言葉が、どのような経過で文章になっていくのか、年齢段階によって、どのような文（叙述）を使用するようになるのかについての知見も重要である。

### 3. 生活年齢と知能（発達）年齢の関係

検査項目「絵の叙述」について、生活年齢と知能年齢による合格者の分布を図18に示した。

検査項目に対する通過年齢が、生活年齢と知能年齢によって相異なるのは、既に述べたように、当時の換算表が古くなって改定を必要としていた状況もあるが、項目に合格するようになる様子が生活年齢と知能年齢によって異なっていることも伺われた。図の中で合格領域をどのように考えるのか、被検児を増やしてさらに検討することが望ましい。

さらに、年齢による合格率の上昇が急激であると、年齢を丸め2項目の通過年齢を求めると平均値の効果によって通過年齢がずれて求められることも判った。これらは今後の検討課題であろう。

### 4. 終りに

新K式検査を、新しく標準化し、公刊するのは想像以上に大規模な事業であった。昭和25年以来使われて来た検査の歴史、京都市児童院を中心とした検査の臨床的使用による経験、童心会を中心に幼稚園や保育園で年間5千人を超える子どもの検査などの背景があってもなお最小限必要な作業が膨大であった。新しく検査を作るのには、2桁多く資料が必要であろうし、一応完全な検査に仕上げるまでには試行期間も5年や10年は必要であろう。改めて、鈴木ビネー検査を1人で仕上げられた鈴木治太郎博士の努力に敬意を払うと共に、最近、簡単に検査が作られ使用されすぎているのではないかと不安になる。

検査項目の1つである「絵の叙述」について、図版を変更し、判定基準を検討するためだけでこれだけの分析が必要であった。まだまだ資料の数が不十分であると痛感する。検査の信頼性を高めるためには、残っている項目についても分析する必要がある。

検査項目に子どもの反応が、何のような過程で変化して行くのか、それが子どもの如何なる内的構造を反映しているのか、知るべき課題は多い。検査項目の内容を、社会的文化的背景に合うように変更し、換算表を更新するのは当然として、その他にも、判定基準など今後さらに検討してより良い検査にしなければならないと考えている。

最後に、被検者となってくれた子ども達、検査を施行して下さった童心会の皆さんに感謝する。

### 〔文 献〕

Binet, A & Simon, T. 1905

Méthodes nouvelles pour le diagnostic du niveau intellectuel des anormaux.

L'Année Psychologique, 11, 191~244 [Kite の訳, 中野・大沢の訳あり]

Binet, A & Simon, T. 1908

Le développement de l'intelligence chez les enfants.

L'Année Psychologique, 14, 1~94 [Kite の訳, 中野・大沢の訳あり]



Binet, A & Simon, T. 1954

La Mesure du développement de l'intelligence chez les jeunes enfants.  
Armand Colin, Paris.

(大井・山本・津田訳 ビネ知能検査法の原典 日本文化科学社, 1977)

京都市児童院 1962

K-B個別知能検査の手引 京都市児童院

京都市児童院 1962

K式乳幼児発達検査の手引

京都市児童相談所紀要, No.2

嶋津峯真・生澤雅夫・中瀬惇 1980

新版K式発達検査実施手引書, 同検査用具

京都国際社会福祉センター

嶋津峯真・生澤雅夫・中瀬惇 1983

新版K式発達検査実施手引書(増補版), 同検査用具

京都国際社会福祉センター

嶋津峯真 監 1985

新版K式発達検査法 ナカニシヤ出版, 京都

鈴木治太郎 1948

実際の・個別的 知能測定法 東洋図書, 大阪

Terman, L.M. 1916

The measurement of intelligence. Houghton.

Terman, L.M. et al 1917

The Stanford revision and extension of the Binet-Simon Scale for measuring intelligence.

Warwick & York.

表1 被検者の分布

生活年齢	男	女	計	CA平均	I Q平均
4:2~4:11	7	10	17	4:10	113.5
5:0~5:5	38	31	69	5:3.3	113.1
5:6~5:11	23	26	49	5:10.9	108.5
6:0~6:5	29	28	57	6:2.7	109.2
6:6~6:11	28	33	61	6:8.1	104.4
合計	125	128	253	5:10.2	109.2
I K G	63	66	129		
S D N	62	62	124		

表2 被検者の知能分布

I Q	被検者数	生活年齢
60~89	11	5:10.5
90~94	11	6:3.3
95~99	29	5:11.9
100~104	33	6:0
105~109	36	5:11.3
110~114	54	5:10.4
115~119	38	5:8.7
120~124	16	5:7.4
125~129	11	5:6.7
130~134	5	6:7
135~139	3	5:8.3
140~157	3	5:0
合計	250	5:10.5

表3 図版1, 反応の分類

生活年齢	被検者数	列挙人数	%	列挙総数	平均	列挙と 叙述人数	%	列挙総数	平均	叙述総数	平均	叙述人数	%	叙述総数	平均
4:2~4:11	17	13	76.5	74	5.7	—	—	—	—	—	—	4	23.5	10	2.5
5:0~5:5	69	47	68.1	244	5.2	5	7.2	19	3.8	11	2.2	16	23.2	47	2.9
5:6~5:11	49	26	53.1	166	6.4	7	14.3	33	4.7	16	2.3	15	30.6	36	2.4
6:0~6:5	57	24	42.1	159	6.6	4	7.0	12	3.0	12	3.0	28	49.1	69	2.5
6:6~6:11	61	21	34.4	129	6.1	6	9.8	12	2.0	8	1.3	31	50.8	72	2.3
合計	253	131	—	773	5.90	22	—	76	3.45	47	2.14	94	—	234	2.49

表4 図版2, 反応の分類

生活年齢	被検者数	列挙人数	%	列挙総数	平均	列挙と 叙述人数	%	列挙総数	平均	叙述総数	平均	叙述人数	%	叙述総数	平均
4:2~4:11	17	13	76.5	35	2.7	—	—	—	—	—	—	4	23.5	9	2.3
5:0~5:5	69	30	43.5	77	2.6	5	7.2	10	2.0	6	1.2	33	47.8	61	1.8
5:6~5:11	49	20	40.8	69	3.5	6	12.2	12	2.0	9	1.5	22	44.9	46	2.1
6:0~6:5	57	17	29.8	46	2.7	6	10.5	11	1.8	10	1.7	31	54.4	68	2.2
6:6~6:11	61	14	23.0	46	3.3	9	14.8	20	2.2	13	1.4	37	60.7	72	1.9
合計	253	94	—	273	2.90	26	—	53	2.04	36	1.38	127	—	25.6	2.02

表5 図版3, 反応の分類

生活年齢	被検者数	列挙人数	%	列挙総数	平均	列挙と 叙述人数	%	列挙総数	平均	叙述総数	平均	叙述人数	%	叙述総数	平均
4:2~4:11	17	13	76.5	47	3.6	1	5.9	4	4.0	1	1.0	3	17.6	6	2.0
5:0~5:5	69	32	46.4	130	4.1	4	5.8	14	3.5	8	2.0	32	46.4	56	1.8
5:6~5:11	49	17	34.7	71	4.2	12	24.5	50	4.2	18	1.5	19	38.8	32	1.7
6:0~6:5	57	21	36.8	70	3.3	4	7.0	9	2.3	8	2.0	32	56.1	59	1.8
6:6~6:11	61	15	24.6	54	3.6	5	8.2	7	1.4	13	2.6	41	67.2	67	1.6
合計	253	98	—	372	3.80	26	—	84	3.23	48	1.85	127	—	220	1.73

表6 図版1, 列挙の対象

生活年齢	被検者数	列挙者	お母さん	子ども	ひと	猫	人形	熊	ぬいぐるみ	玩具	積木	絵本	本	紙	塗絵	筆筒	机	椅子	コップ
4:2~4:11	17	13	5	2	—	12	8	4	1	—	4	3	—	—	—	4	3	5	4
5:0~5:5	69	52	12	10	9	37	34	10	—	4	37	5	4	3	—	16	7	17	14
5:6~5:11	49	33	18	12	2	24	22	10	—	2	20	1	4	2	1	10	10	14	8
6:0~6:5	57	28	10	10	—	22	17	3	—	1	18	5	2	1	—	19	6	14	11
6:6~6:11	61	27	12	8	2	17	15	7	—	1	14	4	—	1	1	13	3	8	6
合 計	253	153	57	42	13	112	96	34	1	8	93	18	10	7	2	62	29	58	43
生活年齢	被検者数	列挙者	茶入	やかん	台所	洗場	スリッパ	花	盆	皿	お膳	冷蔵庫	家	たたみ	ふすま	ふとん	プロック	戸	窓
4:2~4:11	17	13	2	3	2	—	3	1	—	—	1	1	—	—	—	—	1	—	—
5:0~5:5	69	52	11	3	3	—	10	1	—	—	—	—	1	1	2	1	1	—	1
5:6~5:11	49	33	4	2	3	—	11	4	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1
6:0~6:5	57	28	4	5	3	2	6	1	—	—	—	—	—	1	1	—	1	1	2
6:6~6:11	61	27	3	1	1	—	7	4	1	—	—	1	—	—	—	—	—	1	—
合 計	253	153	24	14	12	2	37	13	1	1	1	2	1	2	3	1	3	2	4
生活年齢	被検者数	列挙者	カレン	写真	引出	靴下													
4:2~4:11	17	13	—	—	1	—													
5:0~5:5	69	52	1	—	—	—													
5:6~5:11	49	33	—	1	1	—													
6:0~6:5	57	28	—	—	—	1													
6:6~6:11	61	27	—	—	—	—													
合 計	253	153	1	1	2	1													

表7 図版2，列挙の対象

生活年齢	被検者数	列挙者	ひと	お父さん	おじさん	警察	おまわりさん	巡査	刑事	人間(他)	新聞	バス停	棒	家	帽子	眼鏡	時計	鉛筆	ネクタイ	ズボン	服	
4:2~4:11	17	13	7	3	—	4	3	—	—	1	9	—	—	1	—	1	—	1	—	—	—	
5:0~5:5	69	35	12	5	4	7	18	2	1	2	25	6	—	1	5	1	4	—	1	—	—	
5:6~5:11	49	26	10	4	3	13	10	—	—	1	19	8	1	1	—	—	1	—	—	—	—	
6:0~6:5	57	23	9	1	1	5	7	—	1	—	13	2	—	1	2	2	3	—	—	1	—	
6:6~6:11	61	23	5	2	1	8	11	—	—	1	13	5	—	1	1	1	4	—	—	—	1	
合計	253	120	43	15	9	37	49	2	2	5	79	21	1	5	8	5	12	1	1	1	1	1

表8 図版3，列挙の対象

生活年齢	被検者数	列挙者	ひと	お父さん	お兄さん	お姉さん	子ども	舟	ボート	オール	漕ぐもの	棒	木	森	山	島	アヒル	ひよこ	小鳥	雀	鳩	動物	ヨット
4:2~4:11	17	13	5	3	3	4	4	4	8	2	1	—	2	—	1	—	3	1	3	—	—	—	2
5:0~5:5	69	36	11	11	4	6	8	27	5	—	3	2	10	1	3	3	9	3	6	—	—	1	—
5:6~5:11	49	29	7	12	5	9	8	15	5	—	—	1	9	1	5	4	8	2	6	1	—	—	—
6:0~6:5	57	25	7	4	3	3	4	15	5	—	1	—	10	—	1	4	5	1	2	1	1	—	—
6:6~6:11	61	20	4	4	3	1	3	12	4	1	1	1	11	—	3	—	3	—	6	—	—	—	—
合計	253	124	34	34	18	23	27	77	21	2	5	4	42	2	13	11	28	7	23	2	1	1	2

生活年齢	被検者数	列挙者	帆	時計	眼鏡	家	海	湖	水	葉	草
4:2~4:11	17	13	1	—	—	—	—	—	—	—	—
5:0~5:5	69	36	—	2	1	—	2	—	—	—	—
5:6~5:11	49	29	—	—	1	—	1	1	—	—	—
6:0~6:5	57	25	—	1	1	—	2	1	—	1	1
6:6~6:11	61	20	—	1	—	1	—	—	—	—	—
合計	253	124	1	4	3	1	5	2	1	1	1

表9 列挙に付随する反応と無反応

生活年齢	接続詞(ト, ニ)			～の絵			イル, アル			無反応			
	被検者数	図版1	図版2	図版3	図版1	図版2	図版3	図版1	図版2	図版3	図版1	図版2	図版3
4:2~4:11	17	5	3	4	—	—	2	—	—	—	—	—	—
5:0~5:5	69	12	7	6	3	2	4	1	3	1	1	1	1
5:6~5:11	49	8	1	—	—	—	5	4	4	5	1	1	1
6:0~6:5	57	1	—	—	5	2	4	6	2	2	1	3	—
6:6~6:11	61	3	1	—	1	—	6	5	7	5	3	1	—
合計	253	29	12	10	9	4	21	16	16	13	6	6	2

表10 図版1, 叙述の答

生活年齢	被検者数	叙述人数	%	正答者	正答率	動詞	猫+動詞	…で遊ぶ	コタツ+動詞	子が…する	母が…する	母が…を…する	母と子が…する	皆で…する
4:2~4:11	17	4	23.5	3	17.6	1	2	—	—	2	1	3	—	—
5:0~5:5	69	20	29.0	13	18.8	2	11	15	—	6	3	7	2	3
5:6~5:11	49	22	44.9	18	36.7	3	8	6	—	10	1	8	1	—
6:0~6:5	57	32	56.1	31	54.4	3	16	9	—	12	4	12	3	—
6:6~6:11	61	37	60.7	30	49.2	2	24	8	2	3	2	11	2	—
合計	253	115	—	96	—	8	60	38	2	9	11	41	8	3

表11 図版2, 叙述の答

生活年齢	被検者数	叙述人数	%	正答者	正答率	動詞	新聞を見る	…を見る	人が…する	警官が…する	人が新聞を見る	列挙新聞を見る	皆で新聞を見る	バス停で新聞を見る
4:2~4:11	17	6	35.3	4	23.5	—	2	—	—	1	—	2	—	1
5:0~5:5	69	38	55.1	24	32.8	—	16	7	7	—	7	10	2	5
5:6~5:11	49	29	59.2	23	46.9	—	6	8	—	1	8	7	—	4
6:0~6:5	57	37	64.9	32	56.1	2	11	4	2	—	11	11	1	7
6:6~6:11	61	46	75.4	37	60.7	—	12	10	7	—	11	6	2	8
合計	253	156	61.66	120	—	2	47	29	16	2	37	36	5	25



表12 図版3，敘述の答

生活年齢	被検者数			%	正答者数	正答率	動詞	舟に乗る			人が乗る			人が舟に乗る			列挙・舟に乘る			皆で舟に乗る		
	0/3	1/3	2/3					3/3	0/3	1/3	2/3	3/3	0/3	1/3	2/3	3/3	0/3	1/3	2/3	3/3	0/3	1/3
4：2～4：11	17	4	35.3	2	11.8	1	4	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
5：0～5：5	69	36	55.1	22	31.9	1	16	15	4	6	6	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
5：6～5：11	49	31	65.3	20	40.8	—	11	10	3	5	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
6：0～6：5	57	36	63.2	32	56.1	—	9	16	6	14	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
6：6～6：11	61	46	75.4	36	59.0	—	15	20	9	11	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
合計	253	153	62.45	112	—	2	55	63	22	36	13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

表13 通過率表

生活年齢	被検者数	正答者数			累積通過者数			通過率			標準化資料		
		正答者数			累積通過者数			通過率					
		0/3	1/3	2/3	3/3	0/3	1/3	2/3	3/3	0/3		1/3	2/3
4：2～4：11	17	12	3	0	2	17	5	2	2	100	29.41	11.76	11.76
5：0～5：5	69	40	10	7	12	69	29	19	12	100	42.03	27.54	17.39
5：6～5：11	49	20	11	4	14	49	29	18	14	100	59.18	36.73	28.57
6：0～6：5	57	18	8	6	25	57	39	31	25	100	68.42	54.39	43.86
6：6～6：11	61	18	8	10	25	61	43	35	25	100	70.49	57.38	40.98
合計	253	108	40	27	78	253	145	105	78	—	—	—	—



表16 生活年齢と知能年齢による合格率

年 齢	生活年齢		知能年齢		年 齢	生活年齢		知能年齢	
	被検児	合格率	被検児	合格率		被検児	合格率	被検児	合格率
～4：8	—	—	8	0	6：6	9	55.6	20	35.0
4：9	3	0	1	0	6：7	15	60.0	—	—
4：10	4	25.0	—	—	6：8	9	44.4	19	36.8
4：11	10	10.0	1	0	6：9	15	66.7	—	—
					6：10	13	53.8	17	52.9
5：0	12	33.3	2	0	6：11	—	—	—	—
5：1	11	27.3	—	—					
5：2	12	33.3	9	11.1	7：0	—	—	13	61.5
5：3	10	40.0	—	—	7：1	—	—	—	—
5：4	16	12.5	12	8.3	7：2	—	—	10	80.0
5：5	8	25.0	—	—	7：3	—	—	—	—
					7：4	—	—	18	66.7
5：6	15	33.3	10	20.0	7：5	—	—	—	—
5：7	7	28.6	—	—					
5：8	8	50.0	7	42.9	7：6	—	—	4	100
5：9	8	25.0	—	—	7：7	—	—	—	—
5：10	2	0	20	50.0	7：8	—	—	8	87.5
5：11	9	55.5	—	—	7：9	—	—	—	—
					7：10	—	—	3	66.7
6：0	10	40.0	20	25.0	7：11	—	—	—	—
6：1	7	28.6	—	—					
6：2	10	40.0	18	33.3	8：0	—	—	5	60.0
6：3	8	37.5	—	—	8：1～	—	—	3	100
6：4	9	77.8	22	27.3					
6：5	13	84.6	—	—	合 計	253	—	250	—

表17 京都市内幼稚園・保育所の知能検査結果（童心会による）

実施年度	保育園	幼稚園	総園数	児童数	平均 I Q	使用検査
50	31	60	91	7870	109.8	K - B
51	30	56	86	7458	110.5	K - B
52	29	60	89	7454	111.8	K - B
53	30	55	85	7061	111.5	K - B
54	30	55	85	7039	111.2	K - B
55*	31	52	83	5368	112.3	K - B
56*	31	53	84	4656	104.3	新K式**
57	32	49	81	5167	102.9	新K式**
58	30	45	75	4326	102.2	新K(増補版)**
59	28	46	74	3830	100.4	新K(増補版)

この表は3歳～6歳児の総平均である。

\* 公立保育園の検査結果を除く。

\*\* 換算表を途中で5回変更している。58年10月から現行の換算表を使用。